
悪の化身に花束を

綾野雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪の化身に花束を

【Nコード】

N6876F

【作者名】

綾野雅

【あらすじ】

封魔界学校を主席で卒業したアラティは次期魔王有力候補。そんななか、女悪魔おんなのこをトップにしたくない上官たちは最終課題と称する無理難題を押し付ける。人間界に降り三月のうちに一人の人間と魂の契約をする。主席及第者に与えられる大鍬を手に意気揚々と出かけるアラティだったが…。ドタバタラブコメディーに初挑戦 不定期更新です。

第一章：人間界とたい焼き（1）

冷たい木枯らしが吹きすさぶ、下町の一角。足早に家路を急ぐ人々にいたいけな少女が細かい声をかけた。

「マツチ、マツチはいりませんか？」

けれど年の暮れもせまるこの時期、みな自分のことに必死で今にも空腹と疲労で倒れそうな少女のことを気にかけるような者などいなかった。あまりの寒さに少女は売り物のマツチをひとつ灯して暖をとる。するとどうだろう。灯りの中にしっぽまであんこがいつぱい詰まった少女の頭ほどの大きさのたい焼きがいい匂いをさせて浮かび上がったではないか。

「あら美味しそう。きつとこれは神様が、がんばるあたしにくれたご褒美に違いないわ」

そう少女はつぶやくと小さな黒い手をその大きなたい焼きに伸ばした。

「いただきますー」

「トロル、いい加減にするのじゃ」

今にも頭からかぶりつこうとしていた少女の頭上から、突然怒鳴り声が聞こえてきたかと思うと、たい焼きをつかんでいた手をばちんとひどく叩かれた。

「なっ…なにしゃがるんでい、こんちくしょ…」

さつきとはうつてかわったダミ声で悪態をつきながら声の主を見上げたトロールは自分を見下ろす冷やかな目にさっと顔色を変えた。

「おっ…お嬢様…」

黒曜石よりも更に黒い瞳を持つ色の白い少女が腰に両手をあててじっとトロールを睨んでいる。深紅のリボンでたばねた腰まである髪も少女の瞳に負けないほど真黒で、屋台にかかる提燈の明かりに照らされてもその色が褪せることはなかった。

辺りはにぎやかで、トロールが手を伸ばしていたたい焼きを売る屋台のほかにも様々な店が立ち並んでいる。陽はまだ高く、空には目の覚めるような青空が広がっていた。

「なに馬鹿なことをやっているのじゃ、お主は」

お嬢様と呼ばれた少女は大きなため息をつきながら空中にふわふわと浮いている小さな生き物を見た。それは一見リスのような風体でふさふさのしっぽと大きな前歯を二本持っていた。全身は真っ黒な毛に覆われていて、丸く小さな両手のサイドからは一本の太く短い指のようなものが飛び出しており、どうやらこれを使ってうまくものをさみ取る仕組みのようだった。背中には小さな羽根が一对生えており、それをせわしなく羽ばたかせている。ともするとペットとして流行りそうな風体のそれは短い腕をあごの下に持つてくると、いやいやをしながらぷうと頬をふくらませた。

「だっておなががすいたんですもの」

「かわいい子ぶつても妾には通じないぞよ」

女の子調の声音で同情を引こうとするトルルを黒髪の少女はにべもなくばっさりと切り捨てた。

「ちえ。ついてないぜ。ゲーデ様のご命令でなけりゃ、お嬢様についてこんな世界へなんか降りてきやしなかったのに」

「なんじゃ、何か文句でもあるのか」

ギロリと睨まれてトルルは小さく肩をすくめた。

「だってそうじゃないですか。人間界の貨幣が違っってことぐらい先に調べるべきでしょう。お嬢様はいつも行き当たりばったりで…お嬢様のお守りをするこっちの身にもなってくださいよ」

「何を言うか。妾は一人で大丈夫だと言ったではないか。あのような課題、妾にかかればあつと言う間だと言うのに…」

黒髪の少女は大きなため息をつく。と店脇に置いてあつた小さな丸椅子にどっかり腰をおろした。少女の名前はアラティ。魔界の王、マールに面と向かって苦言を投げかけられる唯一の存在である。魔界の掟では現王の直血を引く者以外が王座に君臨することは許されないことになっており、三人姉妹の真ん中に生まれ、一番頭が良いアラティは、次期魔王第一候補だと言われている。だが実際は、女であるアラティが魔界の王に君臨するのを快く思わない者も少なくなかった。まだマールが現役である間は問題ないが、その現王も既に四千歳を超えており、跡継ぎに玉座を渡すのもそう遠くはない。そんな理由で魔界は今揺れに揺れていたのだが、そんな矢先に行われたアラティの魔界学校卒業式。何も波乱が起きないはずがなかった。

第一章：人間界とたい焼き（1）（後書き）

新連載、はじめました。まだ試行錯誤なので不定期更新になります
が、よろしくおねがいいたします

第一章：人間界とたい焼き（2）

「卒業生代表、愛念」

数十億年の歴史を誇る封魔界学校は数多くある魔界学校の中でも特に厳しく、入学試験も相当のものである。その試験を潜り抜けたとしても、三百年の厳しいカリキュラムが待っている。ここを卒業した者はそれ相応の地位と職業が与えられることになっているが、無事卒業できる者は毎年ほんの一握りで、今年もアラティを含め、卒業したのはたったの十三人だった。

アラティは入学してから卒業までずっと主席を保ち続けた魔界学校史始まって依頼の秀才だった。初めのうちは魔王の娘ということもあって先生方が贔屓をしているのではないかと疑っていたクラスメートたちも、時間が経つうちアラティの残虐非道な悪魔ぶりに誰一人陰口を叩くものなどいなくなっていった。

魔界学校を主席で卒業した証として壇上にあがったアラティが学長から憧れの大鍬を受け取ると会場からどよめきがおきる。

「あいつは一体どんな職業がもらえるんだろう？」

「馬鹿ね。魔王の娘が主席で卒業するんだから次期魔王の座に決まってるじゃない」

そんな会話が会場のあちこちで囁かれる中、職務次官のオリシスが手の中の巻物を厳かに開くと物々しい口調でこう読み上げた。

「本年、主席及第した愛念には職務に就く前条件として課題の達成

を求めるものとする」

「なんじゃと？」

「前条件？課題？そんなもの他の卒業生にはなかったのに、なんでアラテイだけ課されるんだ？」

オリシスの言葉に壇上のアラテイを始め、会場の皆が驚きざわついた。途方もないほど長い魔界の歴史を振り返ってみても、主席及第の卒業生にこのような措置をとった例はなかったからだ。

しばらく皆の動揺が収まるのを待ってから、オリシスは言葉を続ける。

「その課題とは即刻地上の人間界に降り、人間一人とその者の魂を譲り受ける旨の契約を結ぶこと。また、その課題遂行における期間は人間界における三月の間とする」

「妾を職に就けぬつもりか」

文書を読み終わり、くるくると巻物をもとに戻したオリシスをアラテイは冷ややかな瞳で睨みながらそう尋ねた。

「何をおっしゃいますか。先に申しました通り、これは愛念殿が適職。つまり次期王座にお就きになられるのにふさわしいかどうかを試す、所謂最終試験であります」

普通の人間ならばあつという間に体の心まで凍ってしまっただろう、その冷ややかな視線にややたじろぎながらもオリシスは最初から用意していた答えを口にした。

「妾がふさわしくない、とでも言いたげじゃな」

「とんでもない。誰もそのようなことは申ししておりません。ただ、かつて女性の魔王が君臨した事例はなく、全てにおいて慎重を期さねばならない状況。後で道を誤ったなどということのなきよう、万全には万全を期しておく必要があるとの判断から今回このような課題を設けることになったのです。だいたいこれは職務審議会で話し合われ満場一致で決定したことですし、仮にも魔界全土をしょって立つというお方がこのような課題のひとつも満足に達成できないということであれば……」

「もうよい。わかった。このような戯言で妾の力が試されるとは腹立たしいことこの上ないが……仕方がない。受けてたとうではないか」

延々と続きそうなオリシスの説明をアラティは面倒くさそうに遮ると大鎌を右手にひらりと壇上から飛び降りると旅の支度をしに王宮へと足早に戻っていった。

第一章：人間界とたい焼き（3）

翌日。

魔界を出る支度を整えたアラティは一人、魔界の入り口まで歩いてきたところであっしりとした手にその華奢な肩を掴まれた。

「ちっ…父上？」

突然の父王の登場にアラティは素っ頓狂な声を上げた。

父王は天上界との大事な会議のため昨日の卒業式には出席していない。しかも魔界に帰ってきたのは今朝になってからだったから昨日のアラティの卒業式での一件は知らないはずだった。

しばらくの間とは言え、姉妹の仲でも一番かわいがられていたアラティが王宮からいなくなり、しかもその理由が部下たちの陰謀のせいと知れば父王はどんなことをするかわからない。気性の激しい父王のこと、この魔界全てを焼き尽くしてしまう可能性だってある。そう考えたアラティは、まだ事の次第が父王に伝わっていない間に出発しようと考えていたのだった。

アラティの五倍ほどの身の丈を持つ魔王マールはアラティの掌ほどもある大きな目で愛娘の顔をしばらくまじまじと見つめた後、ふうと小さなため息をつく。その風に飛ばされないよう、アラティは咄嗟に地に突き刺した大鍬を両手でしっかりと握り締めた。

「今から人間界に降りるのか」

父王のため息に乱された髪を掻きあげる娘にマールは落ち着いた声でそう尋ねた。

「なぜ余がそんなことを知っているのかと言う顔だな。…ゲーデが教えてくれたのだ。お前が大臣たちの陰謀で無謀な課題に取り組むことになったとな」

疲れた顔で話すマールの後ろから薄藍色の冷やかな瞳を持つ少年が現れた。魔界ではめずらしい流れるような金の髪を持つ少年はまるで天使か神かと見間違ふほど整った美しい顔立ちをしている。実際、魔界には少年に想いを寄せる親衛隊がいくつもあって、ちょっとした魔界のスターよりずっと人気を集めている死神だった。

アラティとは幼少の頃からの知り合いで、腐れ縁と言っても過言ではない。アラティより五十ばかり年上で今は武官長を務めている。女悪魔たちに人気のある半面、無口で無愛想、どんなことにも無関心で鉄仮面という異名すら持つゲーデ自らわざわざ出向いて遠出をしている魔王に今回の件を伝えるに行ったと聞いたアラティはとても驚いた。

「たいしたことじゃない」

ぶつきらばうにそう言ったゲーデはぷいとそっぽを向く。その色白の頬がうつすら赤く染まっていることにアラティは気づかなかった。

「だが、お前に与えられた課題は少々やかいだな」

そう言うと、父王はまたため息をついた。側を流れていた火の川が王の息に煽られて、更に激しく燃え上がった。

「何を大げさな。父上の娘にして首席総代の妾があ程度の課題に臆するともお思いか？」

心配性の父王に少しばかりむっとしたアラティにマールはあわてて言葉を紡いだ。

「そうではない。お前が優秀なのは父が一番良く知っている。課題が単に『人間の魂を奪い取ること』であれば問題はない。お前なら三日、いや一日も経たぬうちに課題を達成するだろう。だが…」

そこまで言って父王はとつぜん齒切れも悪くうつむいた。怪訝に思っ
て見上げるアラティに父王はいつまでたっても続きを言葉にしよ
うとはしなかった。しばらくして、見かねたゲーデが父王に代わっ
て口を開いた。

「だが、今回の課題はヒトとその者の魂について契約を結びしこと
それには人間との『交渉能力』が必要となる。お前にそれができる
のか？」

「奪う前に『交渉』という儀式をすれば良いだけであろう？そんな
こと…」

「いや。お前が思うほど、これは容易いことではない。ヒトと言う
生き物は、得てして用心深い生き物だ。そんなやつらが悪魔と簡単
に言葉を交わすと思うか？」

「ならば悪魔とわからなければ良いであろう？妾とて尻尾ぐらい隠
す術は知っておるわ」

アラティはそう言うが早いかなにやらもごもごとくぐもった声で呪

文のようなものを唱えると、ミニスカートの下から覗いていた細長い尻尾がみるみるうちにちいさくなる。小さな胸をえっへんとそらしたアラティにゲーデは小さなため息をついた。

「確かに、今のお前の姿ならヒトとしてやつらに近づけるかもしれない。だが肝心な契約はどうする？魂をくれと言われてはいそうですかと簡単に引き受けるやつがそう簡単に見つかると思っているのか？」

「そんなもの、なにかうまい餌でも見せてやるまでじゃ。獲物が欲しがっているものか、あるいは願いを叶えてやると言えばイチコロじゃろうて」

「たつたの三月でか。ヒトの国の時間など我等魔族にしてみれば一瞬も同然。そのような泡沫のような時間でいったい何ができる？」

「ではどうせよと言うのじゃ」

次々と繰り出される問いにだんだんうまく答えられなくなってきたアラティは次のゲーデの言葉に絶句した。

「課題を取り下げてくださいよう願ひ出る」

「なんじゃと？」

「課題を受けるのをやめると言っているんだ」

いつになく強気なゲーデの態度にアラティはむっとした。いつもなら自分の能力を全面的に信頼し、無条件で支えてくれるはずのゲーデが、今自分の力に疑問を持っていることが許せなかった。

「断る」

「アラティ！」

「妾は魔界の王マールラの娘じゃ。取り下げを願い出てるなど、その誇りに泥を塗るようなことなどできぬ」

「しかし、もしできなければどうする？課題を達成できなければ、どんなことが待ち受けているかわからないんだぞ」

「良くて魔界追放…もしくは妾自信の命といったところじゃろう」

しれつとして答えるアラティにいつも冷静なゲーデの顔がひどく歪んでいたような気がする。記憶の中にいるゲーデの顔をよく見ようとしたアラティの目の前にトロルがにやけた顔を突き出した。

第一章：人間界とたい焼き（4）

「なっ…なんじゃ」

自分が回想に浸りきっていたことに気づいたアラテイは仏頂面で尋ねた。

「ゲーデさまに引き止められたかったんじゃないんですか？」

「ばっ。馬鹿なことを言うな。なんで妾が…」

顔を真つ赤に染めながら必死に言い訳するアラテイを、トロルはただにやにやしながら見上げている。そんなトロルの態度に益々腹を立てたアラテイだったが急に襲ってきた空腹にへたりこんだ。

「とにかく、おなか为空いているのは妾も一緒。だいたいお主が無賃飲食したせいでこんな屋台でただ働きさせられることになったのではないか。頼むからこれ以上仕事を増やすでないわ」

むっとした顔でそう言う少女をよく見ると確かに店番らしいエプロンをかけている。この辺りは商店街でもかなり賑やかな場所で、周りに立ち並ぶクレープやアイス、たこ焼きなどの屋台にはどれも商品を求めて並ぶ客が長蛇の列を作っている。そんな中でただひとつ、閑古鳥が鳴いているのは二人がただ働きをさせられているというこの屋台だけだった。

「そんなこと言っただって、お客なんてちつとも来ないじゃないですか。売れないまま冷えて捨てちまうぐらいならトロルやお嬢様のお腹を満たしてからあの世に行ったほうがたい焼きファミリーだって

うかばれるってものですよ」

トロルの言葉が甘い悪魔の囁きとなって聞こえてくる。いくらお腹を空かせてがんばったって所詮はただ働き。この世界の通貨が手に入るわけでもなく、ただ今日一日の仕事が終われば無罪放免、自由になれるというだけではないか。そう考え始めたアラテイの脳裏に最後に見たゲーデの顔が閃いてアラテイはぶんぶんと首を振った。

「ええい。何を考えておるのじゃ。このままではあやつ言うとおりはしないか。妾は三月のうちに課題を果たさねばならないというのに」

そう自分に言い聞かせてみるが、一度鳴った腹の虫はそう簡単に治まりそうもない。がつくりとうなだれたアラテイの目の前に甘い香りを放つ茶色い紙袋が差し出されたのはその時だった。開いた袋の中には、クリーム色をした魚の顔が並んでいる。薄い皮でできた腹の部分にばんばんに詰まった甘いあんこがうつすらと透けて見えた。見上げると、顔半分が隠れるほどの大きなめがねをかけた少年がにっこりと笑いかけた。

「なんじゃ、子供」

「これ、食べなよ。お腹が空いてるんだろ？」

「そんなものはいらん」

アラテイは威厳を込めた声でそう言った。少年の外見はアラテイより少し年上のように見えるが人間は悪魔ほど長生きはできないから、アラテイにとっては赤子も同然である。次代の魔王になるうかという者が人の赤子に食べ物恵んでもらうなどアラテイのプライドが

許さない。目の前のたい焼きに今にも飛びつきそうなトロルの尻尾をぐつと掴むとアラティはじつと相手の顔を見つめた。大概のヒトならばアラティの瞳を五分とは見つめていられないはずだった。そんなことをすれば精神が病んでしまうからだ。ところがこの少年は平気な顔をしている。

「そんなこと言わないでさ。そっちの小さい子も食べていいよ」

人間には奇妙な生き物にしか見えないはずのトロルの頭を少年はまるでペットの犬か何かのようにそつと撫でるとそう言った。

なんじゃこいつは？眼鏡をかけているからと言ってトロルの姿が見えないわけはあるまいに。

不審に思ったアラティはしばらくいらないと意地を張ってみることにした。ところが肝心の体のほうはそんな主人の気持ちに同情することもなく、ぐう、と小さな泣き声をあげた。目の前の少年にもこの音はしっかりと聞こえていて、はつと見上げたアラティと目が合うとにつこりと微笑みながら紙袋をアラティの手に押し付けると混み始めた夕方の町へと消えていった。

第二章：園落聖（そのおち・さとる）（1）

二日後。

無事無銭飲食の罪から放免となったアラティたちは大きな橋の袂をとりあえずの寢床にしながら毎日鴨になりそうな人間を探して町を彷徨い続けていた。

簡単に契約者が見つかるだろうと高をくくっていたアラティがゲーデの言葉の意味を理解するのに数日とかからなかった。

声をかけるのは問題ではなかった。ゲーデほどまでではないがアラティもそこそこの器量は持ち合わせている。口調が普通の女の子よりちょっと変わっていることに目をつぶれば十分人間として通用するアラティにたくさんの鴨が警戒することもなく足を止めた。だが契約までこぎつくことはただの一度もないままに、二日が過ぎていた。

「一体何が悪いと言うのじゃ」

もう何人目になるかもしれない逃がした人間の後姿にアラティは傍に落ちていた小石を憎憎しげに蹴り飛ばしながら独りごちた。

完璧に人の娘になりましたアラティに声をかけられた者は皆誰もが立ち止まった。

それなのにだ。アラティが契約の話始めた途端、ある人はまるで子供のわがままに見せるような笑みを浮かべて、またある人は気の毒な人を見るような哀れみの目を向けてそうそうに立ち去っていくのだった。

何事にも最善の策を持ってあたれば不可能なことはあり得ないとはアラティの持論であるが、今回はいくら敗因を考えてみても一向にその理由がわからなかった。

ほとほと困りきっていたところに冷たい雨が落ちてきた。傍のトロルを見るとふわふわと宙に浮かびながら小さな肩をすくめてみせる。

「仕方がない。どこかで雨宿りでもするか」

アラティは小さくそうつぶやくと、ここ数日ねぐらにしている橋の袂へと戻っていった。雨はどんどんひどくなっていく一方で空には分厚い灰色の雲が垂れ下がっている。目的の場所についた時、二人の体は爪の先までぐっしりと濡れていた。

「とんでもない降りであるな。まったくひどい目に…おや？」

やっと雨から逃れ愚痴を言うアラティの目が先客を捕らえた。薄暗い橋の下、大きな眼鏡が白く光る。警戒するアラティたちの前にゆっくり現れたのはあの時の少年だった。

「ひどい雨だね。傘を持ってない時に限ってこれだ。まったくついてないよ」

「お主はあの時の…」

「また会ったね。もう仕事は終わったの？…って、こんな雨じゃお客さんも来ないか」

そう言って人の良さそうな笑顔を作る少年からアラティは警戒した

ように数歩離れた。

あの時少年がくれたたい焼きはアラティたちが売っていたものだった。全部食べ終わった後にしまったと気がついたのだが、アラティたちが口論している間に少年はちゃんと料金を屋台の持ち主に払っていったらしかった。トロルが無銭飲食した代金もおそらくこの少年が持ったに違いない。予定よりも早い時間に仕事から解放してくれた親父の顔がやたらとにやけて見えたのはきつとそういうことなんだろうと、アラティは今この少年の向ける笑顔を見て確信した。

「お主は一体何を企んでおるのじゃ」

アラティの率直な問いに少年は「はて？」と首をかしげてみせる。

アラティたちが何も知らないだろうと白を通すつもりか。さては無垢で親切な少年の振りをして妾を騙し、その目的達成を邪魔するよう上層部から仕向けられた刺客に違いない。

そう考えたアラティは相手の目的など本当はお見通しであると言った風にこう続けた。

「お主が金を払ったと、あの屋台の親父から聞いておる。何の理由もなく妾たちを誰かも知らぬお主がそのようなことをするわけがなかるう」

「別に何も無いよ。ただの気まぐれさ」

不審の目を向けるアラティに少年はさらりとそう言うと、また人の良さそうな笑みを浮かべた。

屋台の親父の口から少年のことが出たことはただの一度もなく、アラティが言ったことはハツタリに過ぎなかった。だが、少年が否定しないことから彼がアラティたちの借金を返したのは間違いない。裏もなしに他人を助けるなど魔界から来たアラティには絶対にありえないことであり、魔界からなんらかの邪魔が入る可能性も否定できないことだった。

問題はこの少年がアラティが魔王の座につくことを良しとしない反対派の者なのか、それともただ単に自分に恩を売ったことを餌に後で何かを求めようという考えのどちらなのかということだった。いずれにせよ、なにか隠していることがあるに違いない。きっと今にその性根を表すはずだが……。

そう思いながら、じつと相手の様子を伺ってみるが少年は特になにかをするでもなく、じつと降り続ける雨を眺めている。何か感じるところがあるかと横で濡れた体をぶるぶる振って乾かしていたトルに目配せした。

アラティの考えに気づいたトルはふわふわ飛んで少年に近づくと、その頭に着地した。こうすることで相手の考えていることを読むことができるのだ。頭に乗られた少年は少し驚いた様子だったがゆっくりとトルを頭の上から下ろすとその黒い頭を優しくなでた。その感触に思わず目を細めたトルだったが、人間に優しくされて気持ちよくなっている自分に気づくと大急ぎでアラティの右肩まで飛んで逃げた。

第二章：園落聖（2）

雨は降り止むどころか益々ひどくなり、川の水かさがみるみるうちに上がっている。いつものアラティならここで少年をその中に突き落としているところだが、試練達成には「相手と契約を交わす」という条件を満たしていなければならない。

ここ数日で、それがいかに面倒極まりないことかアラティには十分わかっていたが、おそらくはどこかアラティに気づかれないところに監視の目が送られているだろうから、ずるをしてもすぐにばれてしまふに違いなかった。

いつそのこと、こやつが誘いに乗ってくればいいのに。

そう思いながら隣にいる少年のほうをそつとうかがうと、その視線に気づいた少年がこちらを振り向いた。分厚いメガネのせいで瞳までは見えないものの、少年の顔はあまりにも無垢でアラティの顔は意味もなく赤くなった。

なぜこのような子供に妾が意味もなく動揺せねばなんのじゃ。

自分の体が生じた奇妙な反応に半ば困惑し苛立ちを感じているアラティの額にそつと少年の冷たい手が触れた。

「なつ、何をする」

アラティはうわずった声をあげるとぼつと少年の傍から離れた。次期魔王の座をかけて降臨してきた自分がこつも簡単に動揺させられていることにアラティはくやしさと恥ずかしさでその顔を益々紅潮

させながら文句を言ってみる。だが少年は全く気にも留める様子もなく、

「顔が赤い。少し熱があるんじゃないのか。こんな寒空の下にずっといたから風邪を引いたのかも…」

と言いながらおもむろに着ていたジャケットを脱ぎはじめると唖然とするアラティの肩にそっとそれをかけた。

少年の体温で温まったジャケットがアラティの冷え切った肩を包み込んで始めてアラティは自分の体が冷え切っていることに気がついた。アラティが生まれ育ってきた世界はいつも地獄の業火に焼かれているため、この地上に比べるとその気温がかなり高い。慣れない環境でろくな食事も取らず屋外で夜を過ごしたアラティの体は本人が気づかぬうちにすっかり疲れ果てていたのだった。

妾自信が気づいておらんかったことをこんな小童が見抜いたというのか。

地上で暮らす人間にはごく普通にわかることだが、魔界の王マール第二皇女として数百年を過ごしてきたアラティにはまったく不思議なことだった。

こやつ、人の子にしては頭の切れる奴かもしれぬ。容姿だけではそう見えぬが…。

『そんなに気になるなら試してみてはどうです？』

一人、考えているとトルルがアラティの頭の中に入ってきてこう言った。

気がつくアラティの頭の上にちんまりと座っている。いつもならトロルが自分の頭に触れて考えを勝手に見透かさないよう、十分注意しているのだが、今のアラティは目の前の少年のことではいいっぱいでトロルが傍にいたことにさえ気づいていなかった。それでもいつもの勝気なアラティなら無断で自分の考えを読んだことに大激怒するところを、今日は素直にトロルの言葉の意味を聞き返していた。

やれやれ、こいつはとんだ厄介ごとに絡まれたものだ。

そうあきれながらも、ただくだらないお守りと思っていた今回の任務がなにやら面白いものになりそうな予感にトロルは一人ほくそ笑むと、やたらと神妙な顔つきをしてこう答えた。

『こいつがお嬢様の思っている通りの切れものかどうか、例の契約を持ちかけてみればわかるってことです』

この提案にアラティはなるほどと思った。どうして今まで気がつかなかったのか。ここまで意味もなく自分にかかわってきた人間だ、この男が本当に何の目的もなく今ここにいるのなら、もしかしたら今まで遭遇したどの人間どもよりも簡単に落とせるかもしれない。もし落とせなければ観察するに興味深いだろうし、落とせばそれこそこちらの思う壺。アラティの試練は達成され、意気揚々と魔界に戻れるということである。

しばらくぼーっとしているのは熱のせいだと思い込んでいる少年にアラティはこほんと一度咳払いをすると、いつもの落ち着いた声で切り出した。

「お主、何か望みはないか」

第二章：園落聖（3）

その一言に少年はきょとん、とした顔をした。唐突に投げかけられた言葉に一体何を言われているのかわからないようである。

「望みじゃ、なにかあるであろう？こうなりたいとか、こうしたいとか、そういったことじゃ」

説明するアラティに少年はああ、そういうことかと納得したようだった。

「そりゃ、ある・・・はずだけど」

なにやら煮え切らない反応にアラティは眉をひそめた。望みがあるかという簡単な問いかけにこれほど曖昧な反応をしたのはこの少年が初めてだったからだ。このまま契約を持ちかけて良いものか。アラティの心に一抹の迷いが生じた時、少年が口を開いた。

「もし、魂を売るっていう契約の話なら、悪いけど引き受けられないよ」

「なっ。なぜお主がそのことを知っているのじゃ」

「あ、やっぱりそうなんだ？確信はなかったんだけどなあ」

驚きを隠せないアラティに少年はぽりぽりと頭を掻きながら照れくさそうに答えた。

「お主、まさか妾の後を付けておったというのか？」

そう尋ねたアラティの頬を嫌な冷たい汗がながれた。人の良さそうな、ともするとぼーっとしているように見える少年がアラティやトロルに気配を気づかせることもなく後をつけるなど普通ならできるはずもない。それにアラティが肝心な「契約」を持ちかける時は周りに気づかれぬよう会話の対象とアラティ以外の時は止めてあるはずだから、仮に偶然この少年が傍を通りかかったただけだとしてもその内容まで聞き取れることはありえない。それなのに、少年は平然とアラティの目的を言い当ててしまった。返答次第ではどうにかせねばなるまい。

爽やかに笑いながらただのあてずっぽうだと言う少年にアラティは益々警戒の目を向けた。その視線を感じてか、少年は少しあわてたようにこう続けた。

「本当だよ。盗み聞きなんかやってない。ただ、君の纏っている気が普通の人とは違っていたし、それに君の連れてるこのコのような生物はこの世界にはいないから」

なるほど少年の言うとおり、トロルのような動物は人間界にはまずいないだろう。だから別の世界からやって来たという考えに至るのは自然かもしれない。だが、もう一つの理由がアラティにはひっかかった。

「妾の纏う気・・・とはどういう意味じゃ？やはりお主・・・」

悪魔の気を見抜いたということは同属の悪魔が若しくは敵対する神属に他ならない。なぜなら普通の人間にそんな芸当ができるはずがないからだ。やはり自分を貶めようとする何者かの手先だったか、

と続けようとしたアラティに少年は意外な言葉を口にした。

「ああ、僕、見えるんだ。神道の家系に生まれたからだと思うんだけど」

「神道？」

「ああ。うちは古い神社なんだ。僕の父さんが神主で…今は義叔父さんがやってるんだけどね」

そう言った少年はなぜか寂しそうな笑みを浮かべて俯いた。アラティがどうしたのかたずねようとしたとき、少年は自分が浮かべていた表情に気づいたのか、照れたような笑みを浮かべるとアラティに向き直った。

「だけどき。そんな契約に乗るような危篤な人はそう簡単には見つからないと思うよ」

「そんなことはないであろ」

「いや、そりゃまあ、誘い方とかいろいろ変えれば話ぐらいは聞いてくれる人も出てくるだろうけどさ。仮にも自分の魂なんだし、よほどのメリットがない限り、そう簡単には・・・いかないよ」

第二章：園落聖（3）

「誘い方とはどういう意味じゃ。妾の誘いが魅力にかけると申すのか」

「え、あ・・・うん。少なくとも僕へのアプローチの仕方じゃ…ね」
むつとするアラティに少年はやや遠慮しながらもそうはつきりと答えた。

アラティには何がいけないのかよくわからない。だが、今まで目星をつけたターゲットから尽く契約を断られている以上、少年が言うことは確かなのだろう。少年の言葉にアラティの肩にいたトルルがその小さな肩をがつくりとうなだれる。期日までまだ日はあるが、住む場所のない二人に課題の達成が長引くのはいろんな意味で歓迎できることではない。例えなんとかターゲットにうんと言わせることができたとしても、契約を完結させて魂を持ち帰るには、先に相手が望む何かを叶えてやらなければならないのだ。内容によっては契約したその日に叶えてやれるだろうが、少年の言うように、人の根源である魂との代償になるような望みがそんなに短期間で叶うものであるはずもなかった。今になってあれだけ父王やゲーデが気を揉んでいた意味がよくわかる。

妾としたことが、こうもあっさりと奴らの策に嵌るとは…。

さすがに事の重大さに気づいたアラティはくやしさに歯をぎゅつかみ締めた。

「どうして・・・そんなことをしているの？」

突然の質問にアラティは何を聞かれているのかわからずに少年の顔をまじまじと見返した。本当なら少年の瞳を見てその真意を探りたいところだが、少年のかけている眼鏡のレンズは最近では珍しいほどかなり分厚いものだったのでその奥の瞳をうかがうことはできなかった。

「人の魂を買いたい理由だよ」

「別に妾が買いたいわけじゃない」

少年の問いかけにアラティは憮然として答えた。

「欲しくもないものを・・・買ってるのかい？」

アラティの答えに驚いた少年は尚もしつこく聞いてきた。アラティに話してやる義理はなかったが、別に隠す理由もないので傍に転がる適当な大きさの石に腰掛けると今までのことを話してやることにした。

「そう・・・だったのか」

一通りアラティの話を聞き終わった少年は悪魔つてのも大変なんだね、とため息まじりにつぶやいた。

「でも安心したよ。君が自分の意思で人間の魂を撮ろうとしてるんじゃないってことがわかったからね」

その少年の言葉にアラティは大きな目をさらにまん丸に見開いた。

安心した・・・だと？一体お主は何を言っているのだ。

そう食って掛かろうと口を開いたアラティは少年の姿がないことに気がついた。慌てて辺りを見回すと、いつの間にも移動したのか少し離れた棧橋の外に少年はいた。やっと雨が止んだらしい。手のひらを上に向けて小雨が落ちてこないか確かめると少年は笑顔でこちらを振り返った。

「どうやら止んだみたいだね。でも、まだ雲が残ってるからまた降り出す前に帰ったほうがいいかもしれない」

「そうか。ならばさっさと帰れ。いつまでもここにいられると迷惑じゃ」

少年の言葉にアラティはぷいとそっぽを向くと突き放すようにそう言った。傍目には冷たい態度に見えるがその実、アラティの胸中は穏やかではなかった。少年がいなくなってしまう。そのことに得体の知れない寂しさを感じたからだった。

（なんだこのきゅつと締め付けられるような、もやもやした気分は寂しい、だと？この妾が？ありえん。そんなことは絶対に…）

そう自問自答するアラティを少年は思案気に見つめた。一向に動こうとしない少年にトロールが不審な目を向ける。大きな硝子の奥に隠れた少年の瞳がトロールのそれを捉えると少年はまた大きな笑みをつくと明るい声でこう言った。うちに来ない？と。

その言葉に驚いたアラティがはつと顔をあげる。

「なんじゃ。お主、まだいたのか？」

自分の考えに没頭していたアラティには目の前に立ち尽くす少年の姿など見えていなかったらしい。とつくにどこかへ行ってしまうていたと思っていた少年がまだ目の前にいることにアラティは心底驚いたようなあきれたような複雑な表情を浮かべたが少年はお構いなしで続ける。

「行くあてがないんだったら、うちに住めばいい。なんにもないところだけど、こんなところにいるよりは雨風も防げるし、よっぽどましだと思っよ」

「なっ…ば、ばかにするな。妾を誰だと思っておる？妾は魔王マール次女にして時期魔王と噂される魔女アラティであるぞ。そなたのような庶民の、しかも新都などという如何わしい宗教にへりくだる道化の家になど誰が…」

そこでトロルが慌てて口をはさんだ。

「わわわわ！！お嬢様、なんてこと言っしてくれちゃってるんですか！こんなありがたい話はないってのに、なぐに勝手に断ろうとしてくれちゃってるんですか、こんちくしょう！」

「なんじゃトロル。お主はこんな人間風情の家に転がり込もうと言うのか」

「そうですよ！いいですか、お嬢様。今あつしたちには宿も、食べ物も、なぐにもないんです。今にも餓死しそудたていうのにこの先お嬢様はどんなプランがあるの？」

「そっ…それはそうじゃが妾にもプライドというものが…」

「しゃーらーっぷ！！お嬢様、今あんたプライドなんて言える立場
つすか？！なら聞きますけど、このままずっと宿なしで過ごす気な
んですか？こんなところでお嬢様と心中なんてあっしはごめんです
よ」

「うつ…うつるさいなあ。ならばさっさと帰ればよいではないか」

トルルのもつともな意見にアラティは唇をとがらせながら、それで
も小さな声で言い返した。

「そうしたいのは山々なんです。それができないからこーやって一
緒にいるんじゃないですか！もともとゲーデさまがあっしを世話役
につけたのはお嬢様一人じゃ心もとないからってことだったんです。
それなのにお嬢様一人を残してあっしが勝手に帰ったなんてことが
したら、あーた！あの！泣く鬼も黙る砂かけ婆でさえうつとりす
る死神のゲーデさまが黙っているとも？！」

興奮したトルルは黒い頭を真っ赤にしてまるで機関銃のように次々
と悪態をついている。頭の毛が雷に打たれたかのように逆立って傍
から見ているとまるで怒ったふぐちようちんのようだった。

「わわ・・・わかった、わかったから、落ち着け、落ち着くのじゃ
トルル。こやつの家によっかいになることにするから…」

「じゃ、じゃあ、そろそろ行かない？急がないとまた一雨きそうだ
よ」

ようやく痴話げんかが終わったらしい二人に声をかけると少年は先
に歩きだす。その後姿にアラティは慌てて効きそびれていたことを

訊ねた。

「あつ。その前にお主、名はなんというのじゃ？」

「僕？僕は聖。^{さとし}神守聖。^{かみもり}よろしくね、アラテイ」

こうしてアラテイとトロルは聖の家にやっかいになることになったのだが、これがまさか二人にとって運命の出会いになるなどとはこのときは誰も夢にも思わなかったのである。

第二章：園落聖（3）（後書き）

やっと少年の名前を紹介することができました（汗）。次から聖のことを少しずつ明かしていく予定です。

第三章：円樂寺（えんらくじ）（1）

聖の家は大きな門構えのあるかなり古い神社だった。

石でできた三十段ほどの階段を上り、頭上高くに聳え立つ鳥居をくぐると目の前に大きな社が現れた。石畳の両脇には物々しい造りの狛犬が鎮座していた。聖はアラテイたちに少し待つように言うと小走り賽銭箱のある社に向かった。社の屋根に下げられた鈴を軽くならすと手を合わせる。なにやらもごもご言っているようだったがアラテイたちがいる場所からはよく聞き取れなかった。暇をもてあましたアラテイが広い庭の奥に目をやると、年代を感じさせる古めかしいが大きな屋敷が見えた。まるで昔の富豪のような家に神社がそんなに儲かる職業なのだろうかと首をひねっていると、いつの間にか戻ってきた聖が二人をこっちだと促した。

「何をしていたのじゃ？」

そう訊ねるアラテイに聖は神様に友達が来たことを告げたただけだと答えた。

「友？まさかそれは妾たちのことではあるまいな？」

「もちろんだよ。それとも他に誰かいたっけ？」

「わっ……妾はお主の友などでは……ってお主、どこへ行く？」

さっき見かけた大きな屋敷の傍を通り抜け、少し離れた先にある小

さな小屋へと向かう聖にアラティは不思議に思つて訊ねた。どう見ても大きなほうが本宅で、あの小屋は良くて離れか物置ではないか。けれども聖はアラティの思惑とは反対に頭を振つて見せた。

「あつちの本宅。言つただろう？今は叔父さんが神主をやつてゐるつて。本宅へは入れないんだ。僕は円樂寺の後継者じゃないからね。ほら、こつちだよ」

聖は不可解な言葉を残すと一人でさつさと小屋の中へ入つてしまつた。急ぎ聖の後を追うとなるほど小さく質素ながらも居心地のよさそうな檜造りの部屋が二人を待っていた。先に部屋にあがつていた聖を真似て玄関で靴を脱ぐと素足に檜でできた床がひんやりと心地よかった。

「ほら、あつちが洗面所だから、二人とも手を洗つてきてよ。僕はお風呂の用意をしてくるからさ」

そついうと聖はさつさと部屋の奥へと行つてしまつた。仕方がないのでアラティはトルルをつれて言われたとおりに手を洗いに行く。風呂も入れるということだったので二人は手と顔だけさつと洗うことにした。二人が入り口近くの居間に戻つてくるとさつき聖が消えたほうと反対側の部屋からなにやらカタカタと小刻みなリズムを刻むのが聞こえる。そつと覗いて見ると粗末な台所でなにやら夕飯の用意をしている聖が目に入つた。

「なんじゃ、お主。風呂の用意をするのではなかつたのか？」

そつアラティが声をかけると聖は右手に包丁を左手ににんじんを持つた格好でこつちを振り向いた。

「ああ、もう用意はしたよ。だけど風呂は焚けるまでしばらくかかるから、先にご飯にしようと思って。君、好き嫌いとかない？」

「好き嫌いも何も、妾は人間界に降りてまだ間がないのじゃぞ。しかも無銭飲食で働かされていたぐらいなのだからいろいろ食べているわけはなかるう？」

やけに無銭飲食という、普通の人間ならみっともなくて隠したがるようなことをいかにも自慢げに言うアラテイに聖が苦笑する。だが肝心のアラテイにはどうして聖がそんな顔をするのかわからなくて眉をひそめた。

「ああ、ごめんごめん。そうだったね。すっかり忘れていたよ。けど、じゃあ何？ここに来てから君は何も食べてなかったって言うの？」

「ふむ。ヒトの食するもので口にしたものと言えば、お主からもらったあの『たい焼き』とか言うものだけじゃな」

二人が働かされていたのがたい焼き屋で、そこで働いていた理由が腹をすかしたトルが勝手にその売り物を食い尽くしたのが原因だそうだから、アラテイの言うことに間違いはないのだらう。けれど聖がアラテイにたい焼きを渡したのは2日も前のことだ。いったい何日前から人間界にきているのか知らないが、そんなに長い間何も食べずにこの数日をすごしていたというのだらうか。悪魔というのはそんなにタフにできているのだらうか。

それも不思議だったがそれよりさらに聖の興味を惹いたのはアラテイの意外な人の良さっぷりだった。彼女の言うことが本場で、屋台を食い尽くしたのがこの得体の知れない毛むくじゃらのぬいぐるみ

だけというのなら、そのとばっちりを受けて働かされるのは誰にとっても歓迎できるものではないだろう。それなのに文句は言ってもこの小柄な少女は逃げもせずいきちんと店番をしたという。聖はもしかしたらこの小さな魔王候補が実はとんでもなく素直でやさしい心を持っているのではないか、そんな気がしてならなかった。

包丁を手に黙りこくった聖にアラティが怪訝な顔を向ける。

「なんじゃ、何かおかしいことでも言っただか？」

「いや、そうじゃない。けど、僕が渡したたい焼き以外に何も食べていないというのなら、君は存外優しい人なんだなと思ってさ」

にやりと口だけで笑った聖の言葉にアラティが茹蛸のように真っ赤になって抗議した。

「ななな！……こっ……この妾が優しいじゃと……！じよ、冗談ではないぞ」

「あれ？どうして怒るのさ？…アラティ？」

どんどん足を踏み鳴らしながら台所をあとにしようとするアラティに聖が慌てて声をかける。

「ええい、うるさい！妾は風呂に入ってくる！よいか、風呂の湯ぐらい妾の力であつという間に沸かせるのじゃからな！」

「あゝあゝ。旦那、ありやいけませんよ」

どこかずれた返答をするアラティの背中を見送る聖に今まで黙って

いたトルルが声をかけた。

「僕、何か悪いことでも言っただかな？」

「そりや旦那、お嬢様は魔界一恐れられている魔王マーラ様に苦言が言えるほどのお方なんですよ。そんなこの世の最後みたいなアクマに『やさしいね』なんて侮辱意外の何者でもありませんよ」

「そついうもんなのか？」

「そついうもんです。普段のお嬢様なら即刻処刑だったんですけどねえ」

「げつ。そ、それは怖いね・・・」

「ええ・・・でも今日のお嬢様は違いましたね。旦那の悪運が強いのか、はたまた何ののきまぐれか・・・」

「しょうがない。お詫びも兼ねて今日は腕によりをかけるかな」

トルルはなにやらまだぶつぶつ言っていたが、聖はさしあて気にもかけずに夕飯の用意をはじめることにした。

第三章：円樂寺（2）

「ふむ。なかなかうまいな、これは」

台所でのちょっとしたハプニングから半時後。風呂から上がったアラティは聖の料理に舌鼓を打っていた。

ここ数年一人暮らしをしているというだけあって聖の料理の腕はなかなかのものだったし、初めて経験するヒトの食事というものにアラティはすっかり機嫌を直していた。その隣でトルルも自分の顔ほどの大きさもある海老のてんぷらにがつり食いついている。いつも一人の時は広すぎた食卓が今日はたくさんの皿で埋め尽くされていた。

「ところで…だ」

食事も中盤に差し掛かった頃、聖が突然切り出す。

「なんじゃ、人間」

「人間って…僕には聖という名前があるんですけど」

「おおそうか、それで聖。何か用か？」

「用があるから声をかけたんでしょうが・・・いや、まあ、それはいいとして、なんなんだ、そのかつこうは？」

「??」

そう尋ねる聖の顔はまるでワインでも飲んだかというほど真っ赤になっている。聖の言うのも無理はない。今アラティはどこから引つ張り出てきたのか男物の白いシャツをがっばりと着ているだけなのだ。リボンできっちり束ねられていた長い黒髪もまだ半乾きのままでゆったりとその華奢な背中に落ちていている。

「なんじゃ。お主は自分が持っているシャツのことすら知らんのか。しょうがないやつじゃな」

そう言いながらアラティは何匹目かのてんぷらを口に運んだ。

「あゝ・・・やっぱりそれ、僕のなんだ!!・・・って、ちょっと、勝手に人の服とか着ないでください!!」

「いいではないか、シャツの一枚や二枚。それに妾は着替えを持ってきたいのじゃ。さっきまで着ていたものは風呂で洗って干してあるし、乾くまで裸でいるのも何だろう?どうしても駄目だというのなら仕方ないが・・・」

「わっ、わー！ー!!!タンマ!ストロップ!!!いい!いいですから、脱がないでくださあい!!!」

シャツの裾に手をかけたアラティを聖はものすごい勢いで止めた。その顔は茹で上げられたタラバガニのようで額には汗まで噴出していた。

「ふふん。面白いやつ」

「お嬢様、何遊んでるんですか。もう食べないんならトロールが残り、食べちまいますよ」

「があっ！トロール、その黄色いのは最後にとっておるのじゃ！最後のひとかけらなのじゃからって・・・あああ~~~~！！！」

聖をいじって遊んでいたアラティの隙を盗んでトロールが最後の甘い卵焼きをその口にほおりこんだのだった。

「ふー食った食った」

大騒ぎの夕食が終わり、アラティは入り口そばの床にごろんと横になった。板の間に薄いカーペットがひいてあり、質素だがすわり心地の良い座布団が置かれている。もちろんそんなもの、魔界育ちのアラティにはさっぱりわからないが、その上に頭をおくと楽だということだけはわかった。

「食後にすぐ横になると牛になるんだよ」

食器の後片付けを終えた聖が居間に入ってくるところにいるアラティをたしなめながらちゃぶ台を挟んでアラティの向かい側に座った。なにやら書物を出してせわしなく鉛筆を動かしているところを見るとどうやら宿題をしているようだ。そんな聖の姿をしばらくぼーっと見ていたアラティだが、ふとここに来てからずっと気になっていたことを尋ねてみることにした。

第三章・円樂寺（3）

「あの、聖……」

「ん？」

「ちょっと、聞いてもよいか？」

「ん、ちよつとまつて、あと一問で終わるから……ん……よし。終わつた。何？聞きたいことって？」

「その、お前の家のことじゃ。社の奥にある大きな屋敷……あれはお主の家ではないのか？」

「うん。違うよ」

「違うつてことはなからう？叔父というのはお主と血が繋がっているのではないのか？いくら後継者じゃないと言っても、なぜお前が本宅に入れない道理がある？」

しれつとして言う聖にアラティは何か嫌な予感がしてなおも食いついた。アラティのつつこみに聖は困つたように鼻の頭を掻く。

「あはは……参つたなあ。あんまり楽しい話じゃないんだけど、言わないといけないよね？」

なんとか誤魔化したい聖だったがアラティは当然という風に大きくうなずくとちゃぶ台の前に正座をして聞く体制をとる。そんなアラティの態度に観念したのか、聖は一瞬陰りのある笑みを漏らすとぽ

つりぼつりと、しかしすっかりした口調で話し始めた。

今から十七年前、円樂寺へと続く階段に一人の赤ん坊が捨てられていた。最初に見つけたのは当然その神社を守る神主夫妻だった。赤ん坊の服には封筒がピンで留めてあり、その子の名だけが記されていた。しばらく二人は紙に書かれた苗字などを頼りに本当の親を探そうとしたが結局は見つからなかったという。神主夫妻は神に仕える仕事をしているだけあって、心の温かい優しい夫婦だった。自分たちに子供がいなくても手伝ってか、二人は赤ん坊を里子に迎えることにした。二人は聖を本当の子供のようにかわいがり、聖は何も不自由ない生活を送っていた。

ところが聖が園落の両親に引き取られてから五年後に園落の両親が不慮の事故で他界してしまふ。その後幼い少年の後見人として、また神主のいなくなった神社の後継者として園落家の親戚がやってきたが、これがとんでもない一家だった。後見人としての世間体もある為、聖を完全に追い出すことはできなかったが、代わりにその当時物置として使われていたこの離れに聖は無理やり追いやられてしまふ。それ以降、本宅へは親戚から呼ばれない限り、一切立ち入ることを禁じられていたのだった。

「なんと、悪魔にも匹敵する悪党ではないか！ううむ。ぜひ妾の臣下に・・・」

「おつ、お嬢様・・・」

聖の義叔父夫婦の冷酷ぶりに感心しているアラティにトロルが思わず突っ込みを入れる。

「いやいや、そうではない・・・。お主はなぜそんな輩の言いなり

「なっているのじゃ！」

トルルの声にはつとしたアラティは、顔を真つ赤にしながらまるで誤魔化すようにわめきたてた。悪魔にはなんてことのないはずなのに聖のことを思うとなぜかアラティは腹立たしいような、やるせないような気持ちになってしかたがないのだった。

「あはは。いいよ。トルル。不甲斐ないと言われれば、それまでなのは自分でもわかつているから」

そう穏やかな顔で言う聖にアラティはますます腹がたった。

「何があはは、じゃ。不甲斐ないとわかっていて何もせず、ただ親の財産が他人にとられるのを指を咥えて見ているだけなんて」

「いや、義父さんたちにとっては他人じゃないし・・・むしろそれを言うなら僕のほうが・・・」

「そついう意味ではな――い！！！」

大激怒するアラティにおろおろしながらも聖は心が温かくなるのを感じていた。もう何年もこんなに自分のことを心配してくれる人と出会ったことがないのだから無理もない。

「やっぱり君は優しいんだね」

「なつ！まだ言うか！妾は決して優しいわけでは・・・」

聖の言葉に噛み付かん勢いで叫んだアラティの手を聖はそつと握り締める。怒りで紅潮していたアラティの顔が驚きの表情に変わった。

「あのね、アラティ。君が心配してくれるのはとっても嬉しいんだ。でも、あと数年すれば、僕だって独り立ちできる年になる。義叔父さんたちが僕を身内と思ってくれないことは悲しいけれど、その分、本宅から干渉されることもないのは都合がいいってこともあるんだよ」

「都合・・・だと？」

「そう。だって考えてもごらんよ。義叔父さんたちがもしも同じ屋根の下に暮らしていたら僕だって勝手に君やトロールを家に入れることはできなかったかもしれない」

「そつ・・・それはそうかもしれんが・・・」

「実際、僕は今まで自由気ままに暮らしてきて困ったことはそんなにないし、それにここは結構快適なんだ。アラティもしばらくいればきつとそう思うはずさ。だから、もう機嫌を直して…ね？」

「聖・・・」

穏やかな聖の声に煮えたぎっていたはずのアラティの心が屈いदैいく。しばらく聖に手を握られたままだったアラティは、聖の大きな眼鏡に呆けた自分の顔を見てうまく説き伏せられてしまった自分にふと気がついた。

またアラティの頬が紅潮していく。

「ぶ・・・無礼もの！！！！何、人の手を気安く握っているのじゃー！！！！！！」

そう叫んだ次の瞬間、アラティの右拳が聖の左頬に炸裂しているのだった。

第三章：円樂寺（４）

夜も更け、皆が寝静まったのを見計らったトロルは一人、外の手洗いがあるところまでやってきていた。周りをきよろと見渡して自分の他に誰もいないことを確認すると、その小さな黒い手を目の前の水の中に浸した。今まで穏やかだった水面がにわかに波立たかと思うとなんと水の中に目も覚めるような金髪と澄み渡る空のように爽やかな薄水色の瞳を持つ青年の姿が映し出された。その人物とは他でもないゲーデである。トロルはご主人様の顔を確認するとうやうやしく頭を下げた。

「トロルか。なかなか連絡がないから心配したぞ」

「すっ……すみません、ゲーデ様」

「何、良い。最初から厄介なことになるだろうとは予測していたかな。だが、お前がこうして私に連絡してきたということは、少しはアラティも課題達成に近づいたということか？」

「近づいたかどうかは知りませんが、とりあえず野宿生活から脱出できたことだけは確かです」

「ほう？では今はどこに住んでいると？」

「町で知り合った小僧のところですよ。円樂寺とかいう神社の養子だとかでその離れに」

「これはこれは。次期魔王候補の住まいが神社とは…また面白い所

に厄介になっているものだな」

トロルの言葉にゲーデはすつとその目を細めた。白く、細長いゲーデの指がその流れるような金髪をからめとると人差し指に巻いてはほどくという動作を繰り返す。それは彼が何か考えるところがあるときに見せる癖だった。

「言われてみればそうですね」

トロルは水面越しに覗く主人と顔を見合わせるとにやりと笑みを交わす。

「で、その小僧とはどんな人間なのだ？アラティが契約をこじつけられそうな相手なのか？」

「いや、それがですね、そいつ、なんだか変なんですよ」

「というと？」

「うーん、なんて言ったらいいんだろう」

「善からぬ輩なのか？」

そう言つてゲーデは少し不安そうな表情を見せる。なんだかんだ言つてはいてもやはりアラティのことは心配なのだ。

「いえいえ、そういうわけじゃないんです。善い悪いで言つたらたぶん虫も殺さぬ奴つてぐらいお人好しな人間なんです。なんてつたつて、あのお嬢様を『やさしい』なんて言っちゃうヒトですからね」

「へえ。それは人間にしてはなかなか見込みがあるではないか」

「そうなんですけどね、ただ、おいらの読心術が効かないんです」

「何？」

「ホントなんです。お嬢様が魔界からの刺客でないか心配していたんでちよつくら頭を除かせてもらおうと思ったんですけどね、これがないんにも見えやしない」

「ふむ。確かにそれは気になるな」

「でしょでしょ？」

「ああ・・・。やはりそれはオシリスかその腹心が送り込んだ刺客ではないのか？」

「うん。たぶんなんですけど、それはないです」

「どうして？」

「いやだって、あいつから悪魔の気配は感じられなかったからですよ。魔族ならかならず持っている気配があいつにはなかったんです」

「ふうむ。通常の魔族ならお前の術から心を守り、更に悪魔としての気配を消すことなどできるはずはない。：もし出来るとするならば高位魔族だけ・・・ということか」

トロルの説明にゲーデは弄んでいた髪から指を放すと腕を組んだ。

「その通りです。だけどあんなお人好しでそんなすごい高位魔族だとはどうしても思えないですよねぇ・・・」

「なるほど、これは少し調べて見る必要がありそうだな」

「どうでしょうか？」

「お前は今のままアラティの傍にいて彼女を守ってくれ。そしてその小僧に何か少しでもおかしいところがあつたら私に連絡を。ただし、このことはアラティには内密に頼む」

「がってんで！それではおいらはこれで」

トロールはまたうやうやしく頭を垂れると何もなかったかのように手洗い場を後にした。

第四章：座敷童（1）（前書き）

だいぶ更新が遅れました（^^；

第四章：座敷童（１）

翌日はまた朝からしとくと雨が降っていた。ちょうど雨季に差し掛かっていたのもあって朝寝するには絶好の季節だった。魔界育ちで雨季すら知らないアラティも暖かな布団にくるまって心地の良いまどろみに身をゆだねていた。

人間界に降りてから数日、満足なものも食べずにずっと野宿だったせいで疲れが溜まっていたことも手伝って、アラティが目覚めたのは聖が学校に向かってから既に３時間も過ぎたであろう頃だった。

空腹に目覚めたアラティが食卓に向かうとちゃぶ台の上に聖がアラティとトルル用に用意した朝ごはんを見つけた。傍に置かれたメモを開くと几帳面な字でこう書かれていた。

『アラティへ：学校に行ってください。予備の鍵がないので今日は家にいてくれると助かります。２時までには戻れると思います。朝ごはんのお味噌汁はあたたためてから食べるといいよ。昼ごはんは冷蔵庫にオムライスを作っておいたから、これもあたたためて食べてください。 - 聖より』

今朝のメニューはごはん味噌汁、アジの開きの焼いたものだった。

「ふむ。なかなかうまそうじゃな。オムライス…というのはこの黄色い布がかぶったようなものか。これをあたためるとな…」

冷蔵庫を物色しながらアラティはふと首をかしげる。そんなアラティに気づいたトロルが後ろから声をかけた。

「お嬢様、どうしたんですか？」

「いやな、聖はこのオムライスとかいうものと、味噌汁をあたためてから食せと書いておったのじゃが、一体なんであたためればいいのかと思ってな」

アラティが迷うのも無理はない。人間魔界には電子レンジという便利なものがあるのだが、朝慌てていた聖はその存在についてはおろかその使用法まで記していなかったからだ。魔界での食事は元々すべて食材が新鮮なまま、つまり生で食べる習慣があり、野生の王国並に今捕ったものをその場でいただくことが魔界グルメでの常識である。もちろんグルメでないものもいるにはいるのだが、魔界の住人にはそもそも食べる前に食べものを用意するなんて概念はないので冷えた食べ物を再度暖め直せと言われてもどうしていいかわからないのであった。

「うーん。困りましたねえ。とりあえず暖めろってことですからお嬢様の念力で火をおこせばいいんじゃないですか？」

「確かにそうなんじゃが・・・」

トロルの言葉になんだか煮え切らない返答をする。

「なんです？何か問題でも？」

「いや、いいじゃ」

そう言つてアラティが見せたのは例の聖のメモだった。聖のメモにはまだ続きがあつたらしく、それを見てアラティは困った顔をしていたのだ。

「ええつと…なんですつて…」ぴいーえす。念力や魔法で火は使わないでね。さすがに離れが火事になつたら義叔父さんたちも黙っていないだろうから」

トルルが読んだ部分は昨夜の風呂の一件を指していたのは明白だった。聖の「やさしいね」発言によつて怒り心頭だったアラティは何も考えずに風呂の水を早く沸かそうとしたものだからもう少して風呂場全体が火の海になるところだったのだ。

「うゝん。仕方ないですね。それじゃ、そのまま食べて見たらどうですか？案外いけるかもしれませんよ」

「うむ。そうじゃな…もぐもぐ…ふむ。冷たくても食えることはないか」

「んぐんぐ…そうですね。なんで魚とか焼くんだろーとか思ひやしたが、とりあえずこれはこれで旨いってことで…」

そんなことを言いながら結局2人は少し冷えた朝食と冷蔵庫で冷たくなつた昼食の2食をいっぺんに食べてしまつていたのだった。

第四章：座敷童（1）（後書き）

話は大筋決まっているのであとは書くだけなのですが、最近なんだから遅くてすみません（汗）ぼちぼち更新していきますのでよろしく
お願いします（><）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6876f/>

悪の化身に花束を

2010年10月11日02時27分発行